

## 「主に信頼せよ」 ～あなたは権威を持っていますか～

イザヤ2：22  
使徒19：11～20

「鼻で息をする人間をたよりにするな。そんな者に、何の値うちがあるのか。（イザヤ2：22）」私たちは「信頼」という言葉をどのような意味で使っているのでしょうか。それと似た言葉で「信じる」という言葉もあります。この信じる事と信頼する事には違いがあります。信じるとは「私が相手から何か悪いものは受けないだろうなあ」ということであり、信頼するとは「相手は私に何かしてくれる」ということです。今日、私たちが何に、どのくらい「頼って」生きているかを考えていきます。信仰を持っている私たちは神への信仰を持ち、神に頼り生きています。しかし聖書には鼻で息をする人を頼るなと教えています。それと同時に隣人と助け合い、信頼し合いなさいとも教えています。矛盾をしているように感じます。ではヘブル原語で「頼る」という言葉は「思う、計算する、計画する、課する、尊ぶ、みなす…etc」という意味があります。この言葉は聖書の中では良い意味として「頼りなさい」と使われ、悪い意味で「頼るな」と使われています。イザヤ書2章が書かれた時代はバビロンに捕囚される前でした。しかしこの時はイスラエルの心はだんだんと神から離れていきました。神に頼りつつも隣国と同盟を結び、自国を守られるようにしようとしていました。そのようなイスラエルの民の決断に対して鼻で息をする人を頼りにしてはならないと言われたのでした。聖書は矛盾しているのではありません。これは優先順位について教えています。私たちの中で1番に頼るものはどのようなものであるのかを見ていきたいと思っています。（使徒19：11～20）パウロは宣教している中で悪霊を追い出せるような力を帯びていました。パウロはなぜこのような奇跡を起こす事ができたのでしょうか。それはパウロは神との信頼関係を保っていたからでした。私たちの信仰に少し陰りがある時、悪魔は問題を引き起こしてきます。その時私たちと神との関係に信頼がなければ、悪魔の為すがままになりもっと悪くなってしまいます。パウロはクリスチャンを迫害する中で復活したイエスキリストを心で感じ、救われました。そこからパウロはイエスキリストを信頼するものへと変わりました。イエスに信頼している時は天の御使いが守り、イエスキリストの権威を帯びていました。私たちはパウロのように神に信頼しているのでしょうか、それとも神が私たちに信頼しているのでしょうか。よくやってしまう誤りの1つですが、私たちは神を“信じている”が、神は私たちが“信頼してほしい”ということです。私たちが神を信じているのではあれば、神からの信頼を得る事はできません。その状態ではパウロのように奇跡を行うことなどできません。使徒19章にはパウロの真似をして悪霊を追い出そうとした祭司長の7人息子たちがでてきます。彼らは祭司長の息子ですから神のことは良く知っていました。しかしパウロのように信頼関係を築いていなかったため、悪霊を追い出す事ができませんでした。信頼関係がなければ私たちは何もする事ができません。神との信頼関係が希薄になると人は目に見えるものに信頼関係を求めるようになります。大宣教命令（マルコ16：15～20）は血肉による戦いではなく、霊の戦いです。すなわち、大祭司の息子という立場、津高教会に属しているクリスチャンという立場であっても、私たちが神に信頼していなければ戦う事ができません。敵である悪魔に、「おまえはいったい誰なのか」と言われてしまうからです。私たちは神と信頼し合っているのかを確認しなければいけません。神は私たちが愛しているのですが、信頼されているのでしょうか。私たちが困ったときだけ頼るのでは神から信頼されません。問題が起こった時、神は私たちの求めに答え、助け手を送ってくれます。しかし私たちが思ったとおりでない事があります。その時、私たちはその助け手に対してどのような態度を取っているのでしょうか。素直に受け入れましょう。私たちが主との信頼関係を得るために①信頼の誤りを確認しましょう。これは2番目のポイントとセットです。②十字架の関係を忘れてはいけません。信頼の関係は十字架の関係を逸脱すると誤りになります。十字架の関係の基本は神との関係です。それ以外が1番になることはありません。神との関係の後に横との関係があります。聖書の教えを集約すると『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』（マルコ12：30～31）となります。私たちは神を愛し続けていくと、神との信頼関係が築かれていきます。その愛によって隣人へ流していきましょう。私たちがすべきことは自分を信頼されるに相応しい人にしていく事です。私が信頼している人が私を裏切るはずがないと信頼しています。しかし人は裏切ってしまう。ですから、私たちはその人を赦しましょう。神の福音の広がり方はこれなのです。互いに裏切り合う事がなくなり、信頼し合える関係になることを通して広がっていきます。しかし私たちは自分が信頼している人は裏切るはずはないと思っています。しかし他人は自分の思った通りには動かず、赦せない気持ちになってきます。しかし赦していきましょう。私たちは神から愛されていることに自信を持ちましょう。それが無いから目に見えるものから得ようとしています。日々の生活の中で神との信頼関係を築いていけば、周りにいる人々に裏切られたとしても、怖くはありません。そのために自分を神の前に出すゲッセマネの祈りができる場所が必要になります。この優先順位を間違えないようにしましょう。そして私たちが人を裏切らないよう行動を積み重ねていくと、周りの人は私の事を裏切れなくなります。私たちは自分の周りにいる人の助けとなり、重荷と一緒に背負っていきましょう。②-1として「信頼し、信頼を得る」よう行動していきましょう。私たちの行動で周りにいる人が信頼を得なければいけません。そのため②-2として「愛を受け、赦す」事から始めていきましょう。まずは赦しましょう。しかし人は何度でも裏切るような行動を取ります。聖書は「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」と完全に赦すように教えています。それは私たちが周りの人から自分を信頼させ続けるためです。（マタイ18：23～35）のようにすでに私たちは神に多くを赦されています。それを忘れて、周りの人を赦せないといっています。しかし私たちはこれを乗り越え、赦し愛し続けていかなければなりません。その結果として赦された人は自らが裏切らない人に、信頼する人になっていきます。そのスタートは私が赦し、愛する人になることです。ですから私たちの口で告白しましょう「イエスの御名によって私は〇〇さんを赦します」と。主との信頼関係を得るために③信頼するものの権威を知りましょう。私たちが信頼する相手は自分よりも立場、力などが上の人です。しかし私たちは自分と同等か、下の立場にいる人を信頼しようとしています。その人には信頼しても応える力はありません。私たちが信頼できるのは神しかいません。悪霊が祭司長の息子たちの言う事に従わなかった理由は権威を託されていなかったからです。神から信頼されていれば、神の権威を託されているからです。悪魔は私たちが神の権威を持っているかはわかります。ですから私たちは神の権威を帯びていくために聖書をよみ、私たちが信頼している方を良く知りましょう。そして私たちが権威あるものであることを知りましょう。今日からは神によらない「人から信頼されたい」という思いや「人を信頼しよう」とする思いを捨てましょう。神を信頼し、神の送って下さった助け手と共に歩んでいけばいいのです。私たちは神によらない助けを求めているのであれば、正しい優先順位の中で主を信頼し、歩んでいきましょう。（要約者：平澤一浩）